

---

Fast moon&Beauty sun

麗韻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F a s t   m o o n & a m p ; B e a u t y   s u n

### 【Nコード】

N 9 8 8 1 G

### 【作者名】

麗韻

### 【あらすじ】

いつもならあつという間に過ぎていく帰り道。今日はいつもどろりには行かないみたいだ。でもまあ。たまにはいいんじゃないかな。こんな日があっても。

それは帰り道のことだった。

俺は駅から歩いて家に帰っていた。

俺自身歩くのが速いのかどんどんひとを追い越していた。

たくさん知り合いにもあった。

そんななか歩くのだけは速いと自他ともに認めている自分と同じく  
らしい速度で

歩く二人組がいた。

後ろにいて、確認できないが、声の数からして二人だ。気にはなる  
けど、確認す

る気はないしな。

「覚えてるかな……。」とか、「大丈夫。」という言葉がとき  
れとぎれだが

聞こえてくる。

たまに俺の名前も聞こえてきた。

「月君だったら。」とか

「成瀬つて子。」

と、こんな具合に。

しかし懐かしいあだ名だ。成瀬<sup>ナルセ</sup>槻<sup>ツキヤ</sup>也が俺の名前だ。

小一の頃、「槻」が書けなくて代わりにならったばかりの「月」を  
書いていたら

そんなあだ名を付けられた。

けどどいつの間にかそのあだ名はなくなっていた。

別に嫌いなあだ名でもなかったから、無くなってちょっと寂しかったけどな。

「あの……すいません……。」

気の弱そうな声がした。

こんなんでも謝られたら罪悪感すげーよな。

しかし会話しながらこの速度は疲れるんじゃないか？

「あ……すいません!!」

ほらまた謝ってる。

あれはきついつて

『ドカツ!』

とか思ってたなら突然裏から衝撃が。

そのまま前にバランスを崩すもなんとか堪える俺。

あつぶね〜。

「ほら、ひろち「いきなり何すんだよ!!」」

とりあえず俺はすぐ裏の長髪のババア クラスメイトの千寛チヒロに蹴られた

らしい。なので怒ったいきなり蹴るとは。

どんな教育を受けているんだ!!

いや、年齢は俺と同じで十八くらいだろーけど。

いきなり他人蹴飛ばす奴はババアでいいと思う。

「呼び掛けられたら反応くらいしなさいよ!!!」

逆だろつ。お前はキレちゃダメだろつ。

でも、呼び掛けられたのか？

「いつ?」

「あんたねえ!!人がずつと『すいません』って呼んでたの気付かなかったの!？」

「あれは謝ってたんじゃないのか?」

「ちがいます!!あんたに用があつてこの子が呼び掛けたんです!!」

そういつて前に突きだされたのは肩に掛かるくらいの黒髪で、眼鏡をかけた娘だった。

正直に眼鏡をとれば美人じゃないのかなつてくらいの人だった。

前に出されたらすぐくおどおどしている。

そりゃもう、話し掛けづらくらいに。

おどおどおどおどおど「なに？」ビクッ！！

話し掛けられた途端固まってしまった。

「おい。」顔の前で手を振ってみるも反応なし。

変だなと思って覗き込んでみるとじわじわと顔が紅くなっていて。熱あるんじゃないか？と思って額に手を当てると、案の定かなり熱かった。

「なあ……。この娘大丈夫か？熱あるみたいだけど。」

本気で不安になってきた俺は、矢野に聞いてみた。

「あんたって……。結構鈍感？」

「んなわけないだろ、結構敏感なはずだ。」

そのはずだ。人が近づいてくればだいたい分かるしな。

「……。敏感って……。その返事なあたり鈍感だわ。ひーちゃん諦めな。」

なんか完全に呆れられたようだ。

まあいい。

「とりあえず熱はないんだな。」

「えっ……。はっ……。はい。」

眼鏡の娘 ひーちゃんは、首を何度も縦に振った。

「……。で？本題は？」

「えっと……。あの……。そのですね……。。」

いい加減嫌になってきた俺は、言ってやることにした。

「いい加減その演技やめてくれない？相田アイダ月日ツクヒさん。」

「えっ……。うっそ。何で私って分かったの？」

雰囲気も口調もガラリと変えていった。

相田月日は最近からテレビにも出るようになった期待の若手女優である。

「だから俺は敏感だっていったら？」

えっへんと胸をはった。すげーだろ！って感じで。

「・・・なんかそこはかとなく心配だね。」

妙なところで頭の回転早いのよねー。そういつて矢野は考えるような仕草をした。

「ひろちゃん、ありがとね。もう良いよ、ばれたし。」

「ん、わかった。あとは一人でしっかりね〜。あっ！結果はしっかり教えてね！！」

「そういつて千寛は去っていった。

なんだっただ。

あれ。思わずボーゼン。

「お金はカフエにいる帽子被った人にもらってね〜！！」なるほど雇われていたの

か。そして、フフフと小さく笑ったあと、月日が言った。

「知り合いなのに相変わらずちゃっかりしてるよね。」「知り合いなのか??」

「ばれないようにってことは芸能界関係じゃないんだな。なんのようだ?」

そろそろ本題に入ろうと、急かすように俺は言った。何で急かすかって?早く帰

って寝てーもん。

「えつと・・・だからさ・・・ヒノ日野朝奈アサナって知らない?」  
意を決したという感じで告げられた。

そう言われて、なにか確信があっようだから正直に答える。

「知ってるよ、それがどうかした?」

日野朝奈は昔引っ越していった幼なじみだ。懐かしいな〜とか思った。

「まだ覚えてる?」

「覚えてるよ。」

ちよっと心残りがあるからな。

「そうじゃなくて・・・約束の方。」

「ちよつとまで。なんであんながそれを知ってる？」

「わかんないかな？」

「なんの」

なんのことだ。そう言おうとして気が付いた。

月日が朝奈本人だつてことに。

「お前・・・マジで来たのか。忘れてくれてもよかったんだぞ？俺なんかより良い

奴がより取り見取りだろ。」

おもわず気を遣ってしまう。

だんだん頬が紅潮していくのがわかって、らしくないなとか思ったりする。

「そうだよ。だから、月君を選んだんだよ。だから会いに来たんだよ。」

それくらい察してよ。とでも言いたそうな膨れっ面をしている。向こうも顔が真っ赤だった。

昔の約束とは、別れるときになかなか泣き止まないこいつに、また会えたら付き

合おうと告白したこと。

真剣に言ったんだが状況が状況だった。

泣き止ますための約束だと思われたと思って諦めていた。

まさあ本当に来るなんて・・・。

「ホントにいいんだな？後悔しても知らないぞ？」

「うん。」

はあ。と溜め息を吐きながら続ける。

言いたいことが伝わってないから。

「くどいようだけどこれだけは言っておく。俺は昔の俺とは変わってる。話し方

とかだけじゃなくてな。」

「・・・。」

「いつかそんな違いを見つけると思う。それでも大丈夫って言えるか？」

槻也は少し躊躇ってから付け加える。

「俺は・・・期待して裏切られたくないんだ。」

臆病者の答え。最後の、最大の本音。

それを聞いたとき、朝奈は考える。

そして少しあとに答える。

「それでもいいよ・・・月君が友達からって思うならそうでもいいし、思った通り、思った通り」

りにしていいって言うなら付き合いたい。昔だって知らないこともあったと思うから。」

太陽の日は夜の闇に囲まれた月をやさしく照らす。

闇から解放された月は、燦然と輝く闇のなかとは違い、儂くその姿を映し出す。

槻也の闇は朝奈の言葉によって。取り払われた。

「じゃあ改めて言わしてくれ。」

そして少し躊躇したあと続けた。

「俺は、日野のことが今でも好きだ。」

そんな言葉に顔を真っ赤にして朝奈は言う。

「そう言うのって普通、状況からしてこっちじゃない？」可笑しそうに笑いながら。

「じゃあこっちは言わせて。私と・・・付き合ってください」笑いながらいつ

た。

幸せそうに、本当に幸せそうに。西の空には太陽が、東には月が、二人ことを見守るように輝いていた。

「じゃあ最後は俺からだな。」

「？最後って、これで終わりでしょ？」

訳が分かかっていないようす。こんなんでほんと芸能界渡っていけるのか？って思

うほど無防備な顔だった。

それに、こっやって気を逸らさないといけなくらい可愛い顔だった。

「これだよ。」

お互いが向き合うように抱き寄せ、朝奈の顔を上げてみた。それで察したのか。

「待つて待つて待つて！！まだ心の んんっく！！！」

心の準備とかしてたら時間が勿体ないんだよバカ。

(後書き)

感想・アドバイスがあったらお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9881g/>

---

Fast moon&Beauty sun

2010年10月9日18時19分発行